下準備

あの日から五年、アルカディア王国では長い冬を越え春の到来を迎えていた。今年は例年にもまして厳しい冬であり、凍死者や餓死者も多く、それ故に風は皆が狂おしいほど待望んでいた季節であるのだ。それの到来を祝福しないものはいない。

王国の都の片隅にある輸入本屋にとってもそれは例外ではない。冬は本自体売れするが、新書が入ってくることはまずない。新書がなければ常連には刺激が薄く、そもそも識字率の関係上、新規の顧客はなかなかつかめいない。

輸入の捗る春は、本屋にとっても嬉しい季節である。

「おーい、十三番の棚からあれだしてくれ、えーっと、アーシアの解剖学のやつ、あー名前ど忘れしちまった」

本屋の店主が、客の注文を受け奥に声をかける。

「人体造詣、著ダムウォールですね。写しですか、それｔも訳本ですか？」

「それそれ。あれ、訳本たてまだ訳せてないだろ？新書だった気がするんだが」

「ごほっ、一応自分が訳しておきました」

店主は驚きに目を見張る。それを聞いた客も目を丸くしていた。

訳本とは、他国から入ってきた別言語の本をこの国の言葉に直した本である。最低２つの言語に精通してなければ作成できないし、訳す作業、言葉選びにはセンスも問われる非常に難しいおのである。その作業をつい先日入った新書で行ったというのだ。

「それじゃ訳本をお願いしようかね」

「まいどあり。おーい、訳本を頼む」

「分かりました。少々お待ちください」

奥で手伝いが本を取ってくる間、店主と常連の客は小話に勤しむ。客商売ゆえにこれもまた大事な仕事であった。

「いやー優秀だねえ。あの子」

「最初来たときは、文字も読めない書けないでどうしようもなかったんだがねえ。必死に勉強して、本を読んで、気づけば私より本に詳しくなっちまってさあ」

我が子の自慢話をするようにかををほころばせる店主。

「今じゃある程度取引任せられるし、他国の行商相手でも普通にコミュニケーションが取れるからね。むしろ外国語なんて私よりうまいもんでさ。自慢じゃないですがね」

明らかに自慢したい店主に対し、常連客は苦笑いを浮かべるしかない。

「まあ欠点といえば」

店主がそろそろかと奥に振り向く。足音が近づき、奥から現れたのは――

「ご注文の品です。人体造詣の訳本。ごほ、訳に関してはできるだけ直訳に徹しました。わかりづらい部分があれば、及びいただければ参じて説明致します」

灰色の青年。ぼさぼさの灰髪は長く目が隠れている。肌は青白く。灰でも被ったのかと言わんばかりの埃っぽさ。極めつけは曲がった姿勢。背は低くないが、とにかく姿勢が悪い。見た目としては冴えない、映えない、目につかない。非常に印象の薄い青年である。

「容姿さえ整っていればねえ。子どものときは可愛げもあったんだけど、本にのめりこむにつれてこの有様よ。まあ優秀だしぜいたくは言わんけどさあ」

容姿の酷評にも慣れているのか、特段青年が気にしている様子もない。

「まあいいじゃないですか。ありがとう君。これを私は冬の間ずっと楽しみにしていたんだ。しかし私はマーシアの言葉はわからない。写しを手に入れても、次は翻訳家に任せねばならなかった。その行程が省けたのだ。本当に助かったよ」

そう言って常連客は懐から定価の倍の金額を差し出した。

「これは手間賃だ。受け取っておくれ」

「ごほ、よろしいのですか？」

店主に伺いを立てる青年。店主は頷く。客の心意気は素直に受け取っておくものである。

「ありがとうございます」

きっちり本の半分をもらう青年。それを見て満足したのか、羊皮紙の訳本を手に取り、常連客は店を出して行った。

「これはいただいてもよろしいのでしょうか？」

「正当な仕事賃だ。受け取っておけ」

青年は再度確認を取ってから初めて懐にお金を納めた。と、同時に咳き込む。

店主が徐に青年の顔をみる。いつもより明らかに顔色が悪い。

「最近体調が悪そうだな。今日は上がっていいぞ」

「ごほ、すいません。そうさせていただきます」

店じまいには早いが、青年の体調の悪さのほうが気になるのか、店を閉め始める店主。青年が手伝おうとするが」

「手伝わなくていい。その代わり体調を治すんだ。本を読むのも禁止、帰って飯を食って寝る。そして朝は早く店に来ること。いいな」

「分かりました。お先に失礼します」

青年はペコリと礼をする。そのまま裏手から店を出て行った。

「ただの風邪ならいいんだが」

店主は心配そうに、出て行った青年の曲がった背を見つめていた。

青年は誰の目にも留まらない。目立たない、霞のような存在であった。

家路に着くルートから外れて、別の方向を歩いても誰にも見咎められない。先程の常連客でさえ、すでにこの青年の容姿など忘れかかっているだろう。

路地裏にいたり、人通りが極端に少なくなる。青年は迷いなく足を進める。王都であるこのまちにもデッドスポットは存在する。誰も通らない。だれもいない場所。なんでもない裏通り、通りの舌には小さな用水路が走る。

「来たか。早いな」

「どうやら僕は演技の才能もあるみたいだ」

髪を掻き上げる青年。すると奇妙なほど力強い眼差しをもつ瞳が現れた。

「ほら、カイル、ファヴェーラ。さっき駄賃で買ったりんごだ」

りんごを二人に投げ渡す青年。気づけば猫背も直っている。雰囲気が一変していた。

「悪いなアル」

そう、彼はアルであった。五年前、姉を奪われ、復讐を誓った少年は、青年へと変貌していた。声変わりを終え、大人びた風貌、以前のような鬼気迫った雰囲気は薄れているものの、間違いなくアルである。

「まあ剣闘士甲界期待のホープと盗賊ギルドの精鋭には、りんごなんざいらんと思ったがな」

カイル、ファヴェーラもまた五年の歳月で変化していた。

カイルは更に背が伸び、大柄な身体が目につき、闘技場へ売られた。以降剣闘士として闘技場を沸かせている。新進気鋭の実力者である。

ファヴェーラもまた泥棒ギルドからワンランク上の盗賊ギルドに入る。暗殺ギルド顔負けの隠密術、成長し女性的な魅力を手に入れ、それもまた武器となる。盗賊のとして腕は一級品。

「それで、今日は何の用だ？最近いそがしくて顔も見せなかった男が」

アルがカイルとファヴェーラに遭うのは久しぶりである。最後にあったのは半年前、そのまえもそこまで頻繁に顔をあわせることはなかった。

「仕方ないだろ。覚えることが死ぬほどあった。学ぶことも、な」

カイルとファヴェーラ、二人とも忙しくしていたが、アルは格別である。ほとんど休まず本を貪り、知識を蓄え、身体も衰えぬよう鍛えていた。たまにカイルとあうときも、闘技場で得た経験を得るために稽古を付けてもらう場合がほとんどである。

「でも、もう学ぶことはねえ」

すべてはこの日のために――

「身体も成長した。まあ最近はちと演技のために絞っていたが、少し食っちゃ寝してりゃすぐ戻るしな」

アルは伏していた。この五年、力を蓄えることだけに注力し続けたのだ。アルにとっての冬はあの日から続いていた。それも今日で終わり、アルにとっても春が来る。

「それで、動くのはわかったが具体的にはどうするんだ？」

カイルがアルに問う。動くのは理解できた。五年間がそのためにあったことも三人も理解している。しかし、具体的にどう動くのか、それをアルから聞いたことはなかった。

「そうだな。まずは僕を殺す」

「なっ！？」

いきなり突拍子もないことを言い出すアル。カイルたちは驚くしかない。

「そもそも前提条件として、この国は奴隷が一代で成り上がれるようには出来ていない。奴隷が解放されても『解放奴隷』であって、市民ではない。一番平民が出世しやすい戦争って言うボーナスゲームに俺たちは参加すら許されてないんだ」

解放奴隷は市民に近しい権利を有するが、あくまで奴隷の域を出ない。次の代、つまり子どもから市民の権利、平民へと成り上がることができる。逆にいえば奇跡が起きても当人は永遠に奴隷のレッテルを貼られたままだえるのだ。

「それじゃあ駄目だ。僕が、証明しなきゃ意味がない。そうでしょう、ねえさん」

アルは慈しみを込めて腹を撫でる。そのシクサに、カイルたちは複雑そうな表情をする。

「どれだけかねを積んでも解放奴隷じゃ市民すら超えられない。文官は貴族が占有しているし、そもそも政治参加は市民以上の権利がいる。同じ平面でも農夫にゃ政治参加の権利はない。やはり戦争しかないんだ、成り上がるには、特別な功績を打ち立てるには、それしかない」

そうすると堂々巡り、結局奴隷であった者は這い上がることが出来ない。

「だから俺を殺す。俺を殺して、アルと言う解放奴隷を殺して、俺にこびりついた奴隷というレッテルを打ち消す必要がある」

アルの言うことは理解できる。奴隷が這い上がることは出来ない。剣闘士として頂点に上り詰めても、戦争参加すら出来ない。社会的に認められることはない。だが、それで己を殺すのは本末転倒である。

「とりあえす、だ。明日にでもカイルが本屋に伝えてくれ。アルが体調不良なので暫く暇がほしい。申し訳ないと行っていた、とな。伝染るといけないから看病は控えてもらえ。よしんばきても対処するが、な」

カイルに言伝を頼みながら、アルは用水路に足を向ける。手で水を掬い、顔を洗う。青白い病的な色が落ち、目のくまも消え、健康的で若々しい肌が現れる。

「ファヴェーラも手数をかけたな。いい化粧品だった。女は普段からこれを使っているのだろう。くっく、立派な詐欺師だな、女ってやつは」

「でも私はすっぴん」

「そうか。それはそれで反則な気もするが。まあいいか」

顔を上げたアルは、見違えたような好青年に生まれ変わっていた。否、むしろ化粧で騙していたのだ。ここ三年は毎日化粧を欠かしたことなどない。化粧を落としただけでもほぼ別人の雰囲気、加えて――

「こいつも切って洗えば完璧だろう」

「灰色の髪。本来白髪であるはずのそれは、今は汚れて灰色に見えるが、洗えば白亜の髪が現れる。これもまた変装の一環。これら細かい積み重ねが、解放奴隷アルを殺すための布石。

「まあそれは後で良いか。とりあえず頼むぞカイル。なるべく非常かんたっぷりに、悲しそうに頼むぜ」

アルは濡れた顔を袖口で拭う。

「あとファヴェーラにはいくつか頼みごとがある。あとで俺の家を訪ねてくれ」

「かまわない」

「なにを頼む気だ？」

「なに、ちょっとしたことさ」

カイルは怪訝な表情を向けるが、アルはどこ吹く風。さらりと受け流す。